

十一代孫七郎が「正長元年（一四二八）鉄輪莊十二町歩賜わり」とあり、以来鉄輪に居住又は領有したのであろう。

4 口伝によれば、落城脱出には月夜の中を女人（後世伝えられる虎御前か？）が髪長くなびかせ、横櫛を喰え観世音を背負い、鏡を胸前に下げこれを打ち鳴らしながら走りだし、驚いて退く敵中を突破して福田寺に逃れたと言われる。この時の櫛と鏡は筆者方の火災時に粉失したとも伝えられている。

5 谷川氏滅亡後の観世音は、その後筆者の元屋敷南端（現在矢田守氏宅東隣）現存する矢田一族の始祖（寛治五年・一〇九一年）を祀る矢田家清碑の北側に並んだ約四坪の観音堂に安置され、筆者方の屋号局（つばね）を冠して通称局観音と言われ、村民が礼拝してきた。前記の火災でも屋敷端であったことが幸いして難をのがれた。

明治中期には筆者方は破産して離村し、その後落部民によって祭祀が続いて来、昭和十三年部落集会所（現公民館の前身）建設と共に観世音もこれに移されて現

在に至っている。

6 北鉄輪部落には古くより三体の信仰対象があった。稲荷社・弁財天と前記観世音である。ともに矢田氏の安置であるが、弁財天は盗難にあい社のみが北鉄輪柏本氏宅入口に今も残されている。

稲荷社は矢田アキ氏方東隣に現存し、年一回の祭祀は絶える事なく行なわれている。

観世音は、仁聞作で文化財価値大と広く喧伝されて幾度かの盗難にあったが、不思議にもその都度回収されて住民の信仰対象として大切に奉持され、昔年よりの恒例である旧盆十七日には供養踊りが現在も続いている。

一通の手紙と武家不断枕

安部 和也

十数年前の或る夏の日。一通の手紙が届いた。それは妻宛で差出人は親族のH氏、その手紙には次の様な事が

記されていた。「貴家の四代前の当主油屋順策勝重は、安政七年（一八二四）幕命により天領速見郡内主要道路に、道標を建立している、現存する道標確認を頼む云々と。

当時、私も妻も郷土史に対して無関心ばかりか、我が家の家系についても興味すら持合せなかったが、この手紙により先祖の歴史的遺産を見たい欲求と・文禄年間（一五九二）より続いた家系を調べたい衝動にかられ、その



正面



油屋順策之允 堀助之銘

気になり道標探しが始まった。誰れに相談することもなく、古老に聞いてはただヤミクモに車を走らせた。

錢瓶峠。城腰。七蔵司。カンタン。柞原。由布院。明礬。道標何本かは発見したが、先祖が建てた道標の確証が得られず途方にくれていた時、H氏より野口原の氏の先祖堀助之丞家墓地に以前道標が建っていたが、現在なくなっている。豊岡の稲光氏に聞いたら宜しかろうと、早速同氏に尋ねた。「寺院の名は忘れたが、境内に建っているのを確かに見た」と。

崇福寺。修福寺。宝満寺を探して朝見長松寺に行った。本堂に通ずる参道の右手に一本の道標が建っている。

もしや、と思ひ裏側を見ると、安政七年庚申年、堀助之丞、油屋順策と刻みこまれていた。百五十年以上も風雨にさらされながらも完全な姿で建っていた。その現物に接した時の感激は、たとえ様のないものだった。この道標現在は市美術館玄関前の植込みの中に建っている。

後日、H氏より油屋家に関する資料数点が届いた。その中に「武家不断枕」の一部コピーがあった。嘉永三年（一八五〇）鶴崎の儒者毛利空桑が細川藩を解職され油

屋家仲町の家敷内に隠とん中、「武家不断枕」を発見、始めて世の中に紹介したと言われている。

昭和五十一年、H氏を訪ねた。氏は大麥喜び家宝にておる先祖伝来の品物の中より、油紙に包まれた品を目の前に置き、おもむろに言った。「林仲介が書いた武家不断枕はこれです」と。

それは和紙に書かれた上下二巻になっていた。上巻は肉太い男性的な字で書かれ、下巻は肉細く流れる様なきれいな字で書かれていた。保存が良く余り損傷していなかったと記憶している。

氏は次の様な説明をしてくれた。

上巻は写本。下巻が原稿本。写本と原稿本との組合せは、原稿本と写本、写本と原稿本との二組を作り、うち一組消滅しても他の一組でその存在を証明するための知恵だろう。と

林仲介なる人物は、宝永二年（一七〇五）山城の国、宇治満福寺の添書を持ち、持病の筋痛治療のため堀助之丞家を訪ねた。堀家の厚意により温泉治療に専念。請われるままに村人に学を教え師と仰がれていたが、どうし

たわけか割腹自忍した。持物を整理している時「武家不断枕」が発見され、男の素性が判った。攝州住人林仲介と

本には浅野長矩忍傷の原因が記されていた。それは赤穂の塩に目を付けた幕府の陰謀によるものだ。と

発見された所が天領別府であったため、幕府を批判した此の本は公表を差し止められ、一部の人以上は本の存在すら知らされず、ヤミの中に葬られていたとの事。

H氏は昨年他界した。今年六月初め所用の帰りにH家を訪ね未亡人にお逢いした。未亡人によると、H氏急逝だったため「武家不断枕」の所在を聞き洩し、所在不明、門外不出なので持出しは考えられず、困惑しているとの事。一日も早く発見出来る事を神に念じH家を辞した。

未亡人よりH氏生前大切にしていた帆足万里の書を形見として頂いた。万里の書は難解のため日出町佐藤暁氏に解読をお願いしている。